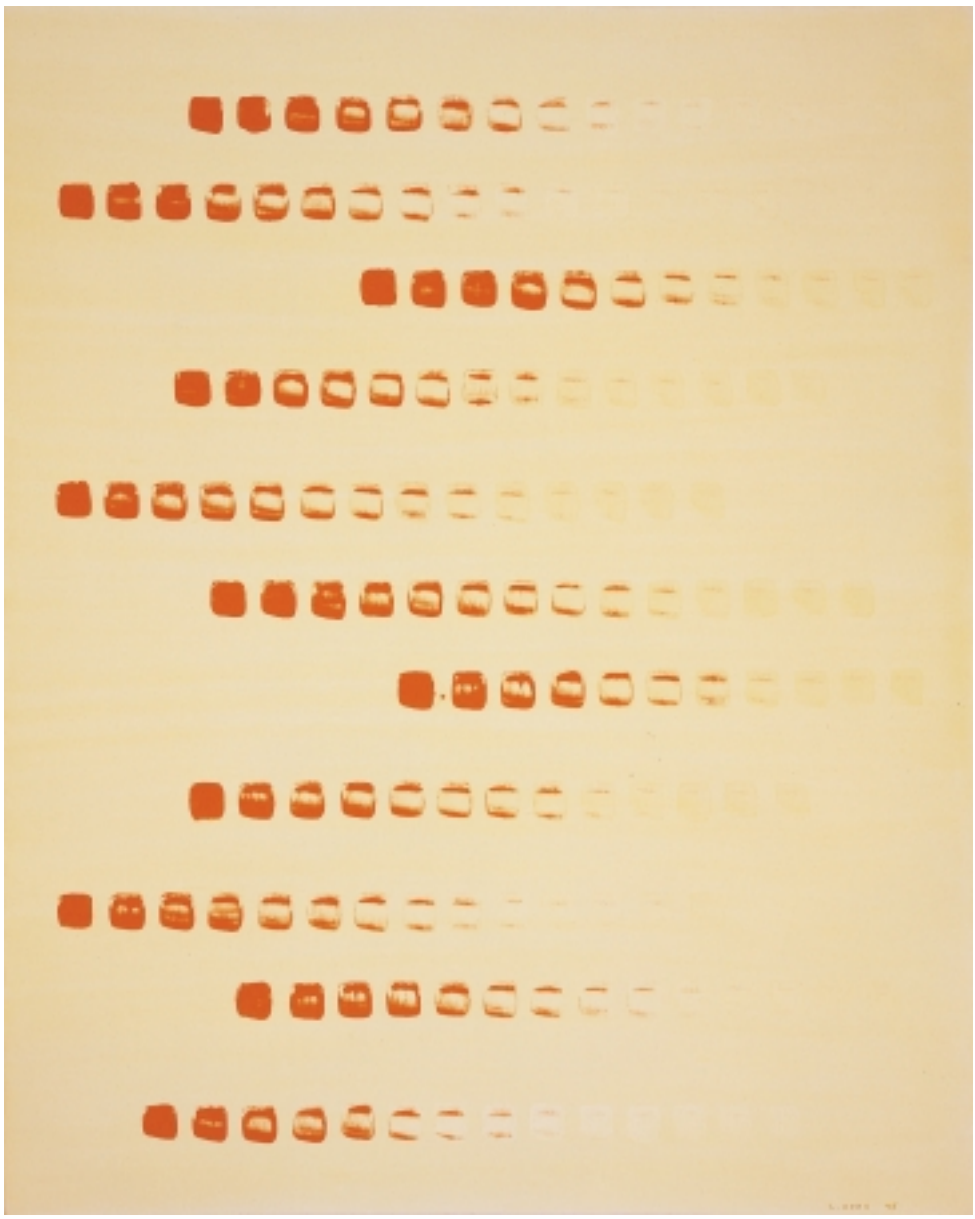
財団法人

日韓文化交流基金 NEWS

no.24



日韓文化交流会議
第4回全体会議「ソウル宣言」発表

第2回日韓歴史家会議

助成事業紹介
韓国現代戯曲ドラマリーディングVol.1
荒木経惟写真展「小説ソウル 物語トーキョー」

The Japan-Korea Cultural Foundation 2003

目　次

2 ●巻頭エッセイ
地域博物館の日韓交流

表紙使用作品および表紙作家紹介

3 日韓文化交流会議　第4回全体会議

7 第2回日韓歴史家会議

8 ●助成事業紹介
韓国現代戯曲ドラマリーディング Vol.1　石澤秀二
荒木経惟写真展「小説ソウル 物語トーキョー」　北澤ひろみ

10 日韓文化交流基金事業報告

12 ●調査ノート
日本における韓国・朝鮮研究 大学教育編2

表紙作品

【点より】
油彩
100F
1978年
個人蔵

表紙作家紹介

李禹煥（リ　ウファン）

1936年韓国慶南生まれ。1956年ソウル大学校美術大学を中退し、来日。1961年日本大学文学部哲学科卒業。1967年以降、前衛的な芸術表現を追求しながら国際的に活躍。「もの派」運動の柱として知られ、多くの国際美術展に出品、国内外の美術館などで個展。
1969年に論文「事物から存在へ」で美術出版社芸術評論賞入賞。2001年高松宮記念世界文化賞受賞。
前パリ国立エコール・ド・ボザール招聘教授、現在、多摩美術大学教授。

巻頭エッセイ

地域博物館の日韓交流―佐賀県立名護屋城博物館―

森醇一朗 ● 佐賀県立名護屋城博物館館長

佐賀県東松浦郡鎮西町に所在する「肥前名護屋城」は、豊臣秀吉が朝鮮半島への侵略を企てた「文禄・慶長の役」の際の出兵拠点施設であり、当時を如実に思い起こさせる17万㎡の本城と130カ所に及ぶ全国諸大名の陣跡が、400年の風雪に耐え、今日に残されています。この名護屋城本城に近接して1993年10月に開館した「佐賀県立名護屋城博物館」は、2003年で10周年を迎えます。

名護屋城博物館は「日本列島と朝鮮半島との交流史」を基本テーマに、特別史跡「名護屋城跡並びに陣跡」の発掘調査と保存整備事業の中核施設としての役割と、常設展・特別企画展・テーマ展から構成される展示による、相互理解から生まれてくる歴史認識の共有を主な活動としています。

その中で、2000年から3年間実施した特別企画展は、多くの成果と問題提起を行うことができました。2000年度には「日韓交流の窓―釜山・蔚山・慶尚南道の歴史と風土―」、2001年度は「祭りと食の文化―光州広域市・全羅南道の歴史と風土―」、そして2002年度には「海洋文化のクロスロード―済州道の歴史と風土―」を開催しました。

2002年10月4日から開催した特別企画展では、済州道の豊かな自然環境、伝説と神話、中国大陸と朝鮮半島の古代文化が交流しあう独特の海の文化にスポットを当てながら、済州道の歴史と風土や日本列島との交流史を紹介しました。また、この地域の無形文化財技能保有者の作品や伝統工芸品を収集・展示して伝統的な芸術文化を紹介するとともに、友好交流の実践として、日韓の子供たちが神話や伝統行事を題材に制作した大型壁画を同時に展示しました。

2001年5月に博物館に「佐賀県日韓交流センター」が併設されたことにより、新たな業務の目標を掲げることになりました。日韓学術・文化交流事業をより一層深めていくため、1. 交流および友好の促進のための「情報提供・相談・交流支援」、2. 交流史の理解を促進する「教育と普及業務」、3. 歴史と文化を紹介する「日韓文化紹介業務」、4. 韓国に関する文化情報を収集及び閲覧提供する「韓国文化情報ライブラリー業務」等の支援を積極的に実施することです。

相互に理解を深めていくためには、各種催事と人々の地域間交流は欠かすことができません。韓国の歴史と風土を知り、九州と比較をしてみれば、朝鮮半島との人々の関わり具合が鮮明になり、友好関係の構築が果たされるものと思います。

名護屋城博物館では、あくまでも史実の確認と常設展示を活動の中心におき、幅広い博物館活動から、真の日韓の友好交流が生まれてくる地域博物館を目指しています。

もり　じゅんいちろう

1943年佐賀県生まれ。國學院大学文学部史学科卒。佐賀県立博物館の開設に考古学担当として携わる。佐賀県教育庁文化課で名護屋城博物館の基本計画を立案。佐賀県立博物館・佐賀県立美術館・佐賀県立名護屋城博物館副館長を経て、2001年佐賀県立名護屋城博物館館長就任。九州の原始・古代文化に関するシリーズ展を企画し、1997年から名護屋城博物館の各種企画展を監修。

日韓文化交流会議　第４回全体会議

10月7日(月)、日韓文化交流会議はソウル新羅ホテルにて第4回全体会議を開催し、「日韓文化交流に関する宣言」(ソウル宣言)を採択・発表しました。99年6月の会議発足からこれまで3年間の足取りを紹介します。

「日韓文化交流会議」は、99年３月の日韓首脳会談において小渕総理（当時）と金大中大統領の間でその設置が合意され、日韓両国間の全般的な文化・芸術交流促進について協議する場として、同年６月、両国の文化・芸術分野の有識者22名が参加して発足しました。

99年９月にソウルで１回目の全体会議を開催した後、これまで４回の全体会議並びに６回の座長・副座長会議を開き、両国間の文化交流活性化のための意見交換や、具体的な事業方策についての提案を行ってきました。会議発足当初は、2002年の、サッカー・ワールドカップの共同開催を両国の文化交流を後戻りすることのない段階までに発展させる絶好の契機と捉え、具体的な交流事業の推進に関する意見の交換が重点的に行われました。この一環として、2000年夏には韓国側委員一行が日本のワールドカップ開催都市を訪問し、大会関連の文化行事の準備状況を視察したり、関係者との懇談を行いました。

さらに同年秋に開催された第２回全体会議からは、「ワールドカップ後」の両国間文化交流の方向性を提示するための「日韓文化交流に関する宣言」（ソウル宣言）の作成作業が始まり、両国委員の間で討論が行われてきました。

会議以外の場でも、日本側千宗室（当時）委員のご厚意により、両国の委員が裏千家の東京道場で茶道のお点前のもてなしを受けたり、韓国慶州での会議の際には、新羅時代の史跡の視察を行うなど、両国伝統文化の真髄に直接触れる機会も設けられました。

４回目となった今回の全体会議では、まず、日本側からは小此木政夫副座長が、韓国側からは鄭求宗委員が、「ワールドカップ後の日韓関係」に関する基調講演を行いました。ひき続き、「ソウル宣言」および「実践計画」案文の最終調整を行い、会議後の記者会見でこれを発表しました。今回の会議で採択された「ソウル宣言」は、これまで３年間の会議の活動の集大成と言えるでしょう。日韓文化交流会議は、この「ソウル宣言」と「実践計画」の内容が実現されるよう、今後も両国間の文化交流の行方を見守っていく予定です。

日　程

10月6日（日）

◆歓迎晩餐会

10月7日（月）

◆午前会議
- 開会挨拶
  - 日本側・三浦朱門座長、韓国側・池明観座長
- 両国事務局活動報告
  - 両国事務局長
- 基調講演
  - 日本側・小此木政夫副座長
  - 韓国側・鄭求宗委員
- 議論
  - 「ソウル宣言」最終検討
  - 「ソウル宣言に関する実践計画」議論

◆午後会議
- 2003年度の新たな事業提案
- 「ソウル宣言」発表および記者会見

◆晩餐

日本側メンバー（50音順、敬称略）

饗庭孝典	早稲田大学講師
小此木政夫（副座長）	慶應義塾大学教授
千玄室	前裏千家家元
田中優子	法政大学教授
芳賀徹	京都造形芸術大学学長、東京大学名誉教授
平山郁夫（副座長）	東京芸術大学学長、日本画家
広中平祐	数理科学振興会理事長
松尾修吾	国立科学博物館監事
黛まどか	俳人
三浦朱門（座長）	作家
水谷幸正	浄土宗宗務総長

韓国側メンバー（韓国側指定順、敬称略）

池明観（座長）	翰林大学校日本学研究所所長、韓国放送公社（KBS）理事長
姜萬吉	尚志大学校総長、韓国史学者
高 銀	詩人
金容雲（副座長）	漢陽大学校名誉教授、数学文化研究所所長
柳 鈞	韓国放送公社（KBS）制作企画センター長
朴性垠	梨花女子大学校大学院教授
李成千	作曲家、芸術院会員
李清俊	小説家、『西便制』著者
林英雄	劇団「サヌリム」代表
張明秀	韓国日報社社長
鄭求宗	東亜ドットコム社長

小此木政夫副座長講演要旨

ワールドカップ共催以後、数々の世論調査の結果に見られるように、両国国民の相手国に対する意識、特に日本側の対韓意識が飛躍的に好転した。具体的には、歴史的な共同作業を成就したという仲間意識、そして共に決勝リーグに進出したという対等意識が若い世代を中心に誕生したのである。

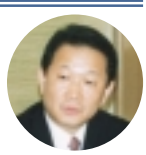
まだ明確ではないかもしれないが、ワールドカップでの韓国の４強進出だけでなく、IT分野、金融構造改革、グローバリゼーション等でも、「韓国に学ぶべきではないか」という意識が日本人の中に芽生えている。これは画期的な変化である。時間はかかるだろうが、このような意識がやがて両国国民の「共同体意識」の形成につながっていく。

日韓両国はすでに、民主主義、市場経済、アメリカとの同盟という「３つの体制」を共有しているが、このような「体制の共有」を土台として、「意識の共有」が生まれつつあることが重要である。日韓自由貿易協定、およびそれを中核とする包括的経済連携が実現すれば、それによって「共同体意識」の形成がさらに促進されるだろう。

現在進行中の日朝国交交渉は、多くの難しい課題を抱えている。しかし、国交正常化が実現したあかつきには、日本からの経済協力を南北経済協力とリンクさせるなどして、南北間の和解、交流、統一に積極的に協力しようとする日本の立場が理解されるだろう。したがって、それは日韓関係のさらなる緊密化に寄与するはずである。

日韓の間で芽生えつつある新しい「共同体意識」は、「優越」や「連帯」といった古い意識とは異なるものであり、対等かつ開放的であり、相互の歴史や文化を尊重する新しい意識として、アジア太平洋時代を先導していくだろう。日韓文化交流会議が行ってきた活動も、そのような意識の形成に貢献するものであった。

鄭求宗委員講演要旨



小此木副座長のお話にあったように、ワールドカップと2002年日韓国民交流年を契機として両国国民の相手国に対する意識は大きく変化し、相互信頼のムードがかつてなく高まっている。

このような変化をうまく生かすことのできる交流プログラムが今後作られるよう、われわれ日韓文化交流会議も貢献していかなければならない。

両国間では、年間の往来者数が350万人（2001年）を記録するなど、量的拡大が続いている。また、韓国ではこれまでに日本大衆文化の段階的開放が進められてきたが、両国の映画や音楽、食文化などが若者を中心とした相手国の社会に抵抗なく受け入れられ、人気を博している。地方自治体間や民間団体などあらゆるレベルにおける交流も活性化した。また、自分が関係するマスコミの分野でも紙面製作協力や共同事業の開催等、これまでになかった試みが次々と行われている。

国民交流年後の来年以降、このような取り組みと熱意、そして相手国に対する関心が冷めることのないよう、両国の政治家、マスコミ、国民は努力をしていかなければならない。

両国の間には、過去の歴史に関する問題も存在しているが、それを克服していくための作業も必要である。そのためにも、両国の未来を担う若者同士の交流を一層支援、拡大していくことが、今後もっとも重要な課題である。

また、日韓２国間だけでなく、北朝鮮や中国を視野に入れた多国間の交流も検討されていかなければならない。

日韓文化交流会議

日韓文化交流に関する宣言（ソウル宣言）

日韓両国の国民的な行事であった2002年サッカー・ワールドカップの共同開催を成功裏に終え、「2002年日韓国民交流年」に関連する事業が順調に進展しつつある今日、日韓文化交流会議は両国政府と国民に改めて日韓文化交流の積極的な拡大を呼びかけるために、「日韓文化交流に関する宣言」（ソウル宣言）を発表します。

1. ワールドカップ共同開催と「日韓国民交流年」

サッカー・ワールドカップ大会の日韓共同開催は、単なるスポーツの祭典ではなかった。それは日韓両国が挑戦する有史以来の国民的な共同作業であり、国民相互の信頼を構築するための絶好の機会であった。相互の信頼は国民レベルでの共同作業とその成功体験を媒介として醸成されるものである。われわれの世代がワールドカップと「日韓国民交流年」関連事業を国民的な行事として成功させたことは、日韓の次の世代に対するよき遺産として語り継がれることだろう。

スポーツの世界では、「よきライバルがよき友人である」ことは珍しくない。日韓両国は互いに切磋琢磨しつつ、心から協力する姿を世界に示すことに成功した。日韓文化交流会議は、ワールドカップ共同開催を通じて実現した日韓国民交流が、今後の両国間の文化交流のよきモデルとなることを切望する。

2. 関心と共感の画期的な拡大

日韓文化交流は、現在、きわめて重要な局面を迎えている。ワールドカップを契機に日韓両国間の人的往来が劇的に拡大し、それぞれの相手国が急速に身近な存在となった。1965年の国交正常化当時、両国間を往来する人々は1年間に約1万人にすぎなかったが、現在、わずか1日の間に同じ数の人々が両国間を往来している。

文化交流はすべての交流の土台となるべき重要な分野であるが、日韓双方に相手国に対する関心や共感がなければ成立しない。その意味で、それぞれの映画、音楽、ファッション、食文化などが紹介され、素直な共感を生んでいることはきわめて鼓舞的な現象である。それらが両国国民間の信頼の醸成に画期的な役割を果たしていることは、最近の世論調査に明確に表れている。われわれは観光や大衆文化の領域で培われたこのような関心と共感をあらゆる分野に広め、両国民間の文化交

第１回全体会議（1999年９月22日、ソウル・新羅ホテル）

韓国側委員の日本国内ワールドカップ開催地視察。右から池明観座長、林英雄委員、茨城県関係者（2000年８月25日、茨城・カシマサッカースタジアム）

第２回全体会議―歓迎のお茶会。
右から池明観座長、千宗室（当時）委員（2000年６月８日、裏千家東京道場）

流を深化させる努力を続けることがこれからの課題であると考える。

3. 新しい文化共同体の形成

日韓の間には、共通の未来を構築するために必要な土台がすでに整っている。何よりも、血の滲むような努力によって、日本と韓国は民主主義と市場経済体制を構築し、それぞれアメリカとの間に緊密な安保関係を維持している。いまや、日韓間には「体制摩擦」は存在しない。言いかえれば、両国関係は「体制共有」が価値観の接近を促す段階に入ったのである。事実、日韓両国が描く21世紀の国家像は共通しており、それは伝統文化と先進技術を基盤とする貿易・産業国家であり、道義、人権、平和、そして文化の尊重においても、世界に誇り得る国際国家である。

しかし、日韓両国はいまだに不幸な過去から必ずしも自由であるとは言いがたい。この「過去の記憶」をどう克服し、個性豊かな文化を育てながら日韓文化共同体をどのように創りあげていくのかが残された重要な課題である。このような課題の克服を通して、東北アジアの未来を切り開くために共に協力することが期待される。

第３回全体会議―両国委員の慶州視察（2002年５月17日、慶州・仏国寺）

4. 日韓文化交流に関する提言

ワールドカップ共同開催と「日韓国民交流年」関連事業は、両国国民間の距離を縮めるのに大きな役割を果たした。このような趨勢をさらに進展させるためには、今後も、両国国民間の交流が完全に定着するまで、いくつかのシンボリックな文化交流事業を継続する必要がある。高句麗古墳群を含むアジア文化財の保存・補修や、そのための日韓共同研究など、「共同作業」型の文化交流を発掘し、積極的に展開するべきである。

それとともに、地域間の文化交流やNGOのユニークな活動を通じた交流、特に青少年の交流等、日韓文化交流ネットワークの拡大を積極的に支援するべきである。また、中国、モンゴル、中央アジア諸国、ASEANなどを加えて、アジア的な規模をもつ文化交流を構想し、日韓が「共同のイニシアチブ」を発揮するべきである。これらを念頭におきつつ、日韓両国は、バランスのとれた双方向の文化交流を積極的に推進していかなければならない。

「ソウル宣言」に関する実践計画

１．日韓文化交流会議は、両国で行われる文化行事に可能な限り相手国の文化団体が参加できるよう積極的に努力する。

２．日韓文化交流会議は、両国の文化団体が交流を行う際、可能な限りの各種便宜を提供するため努力する。

３．日韓文化交流会議は、両国の文化関連機関等、各種団体や機関の実務者間交流を積極的に奨励する。相手国の言語を学習し、一定の期間研修を行う交流がさらに望ましい。

４．日韓文化交流会議は、両国の地域間親善交流の拡大に努力し、青少年（中・高生）交流のための展示・公演等の活動の活性化に積極的に協力する。また、両国国民間の紐帯感を高めるためにはホームステイが非常に重要であり、これを奨励する。

５．日韓文化交流会議は、自国が認定する各種資格を両国が標準化し、相互認定することによって文化交流のための協力を一層強化すべきであると考え、これに対して両国間の法的協議が行われることを希望する。

６．日韓文化交流会議は、両国間の大衆文化交流がより一層実際の効果をあげることが出来るよう、両国の大衆文化産業の間においても相互協力が行われることを希望する。

７．日韓文化交流会議は、両国が共同で実施する文化行事に東アジア諸国も漸次参加できるよう努力する。

第２回日韓歴史家会議

両国歴史研究者の交流の拡充を目的として、
幅広い分野の研究者による討論と、公開講演会が開かれました。

10月19～20日の２日間、東京のホテルオークラで、第２回日韓歴史家会議が開催されました。

この会議は、両国の歴史研究者の交流の場の拡充を目的として昨年より始まったもので、「歴史学国際委員会」の日韓両国国内委員会が中心となってその運営にあたっています。

今回の会議では、「世界史の中の近代化・現代化」を主題として、３つのセッション別に、両国の８人の研究者が西洋史、東洋史、経済史等それぞれの専門の立場から報告を行い、他の参加者との間で熱心な討論が行われました。

会議２日目には全体を総括する総合討論の場も設けられ、２日間にわたる会議を通じて、日韓間の関係のみにとらわれることなく、歴史学という大きな枠組みの中で幅広い意見の交換が行われました。

第２回日韓歴史家会議―歴史学の枠組みをめぐる意見交換が行われた。

会議に先立って、18日には、本会議の開催を記念して、日韓歴史家会議組織委員会と日本学術会議歴史学研究連絡委員会国際交流専門委員会との共催により、日本学術会議講堂において「歴史家の誕生」と題する公開講演会を開催しました。日韓歴史家会議組織委員会日本側委員長の板垣雄三東京大学名誉教授と、安丸良夫一橋大学名誉教授、高柄翊ソウル大学校元総長の３人が、歴史学者として歩んできた道について講演を行いました。

第３回会議は、2003年10月にソウルで開催される予定です。

日　程

◆10月18日（金）

記念公開講演会「歴史家の誕生」
板垣雄三（東京大名誉教授）
安丸良夫（一橋大名誉教授）
高柄翊（元ソウル大総長、大韓民国学術院会員）

◆10月19日（土）

1.世界史的過程としての近代化・現代化
司会：木畑洋一（東京大）
報告：岡本明（広島大）「近代化と西欧化」、裵永洙（ソウル大）「米国極端論」
討論：鄭鉉栢（成均館大）

2.地域レベルにおける近代化・現代化
司会：濱下武志（京都大）
報告：加藤博（一橋大）「地域レベルにおける近代化―オスマン帝国圏―」、白石隆（京都大）「東アジア・東南アジア―新しい帝国秩序の形成」、白永瑞（延世大）「20世紀韓国歴史教科書の東アジア『近代』像」
討論：長崎暢子（龍谷大）、劉仁善（ソウル大）

3.日本史・韓国史における近代化・現代化
司会：佐々木隆爾（日本大）
報告：李成市（早稲田大）「近代日本における通史と伝統文化の創出」、斎藤修（一橋大）「日本近代経済史における連続と画期」、李泰鎮（ソウル大）「韓国史の近代・現代認識と時代区分」
討論：宮嶋博史（成均館大）、金容徳（ソウル大）

◆10月20日（日）

総合討論
司会：中塚明（奈良女子大名誉教授）、李敏鎬（ソウル大名誉教授）

参　加　者

◆日本側（敬称略・50音順）
明石紀雄（筑波大・アメリカ史）、**井口和起**（京都府立大・日本近代史）、**石上英一**（東京大・日本古代史）、**板垣雄三**（東京大名誉教授・イスラム史）、**岩崎宏之**（常磐大・日本近代史）、**岡本明**（広島大・フランス近代史）、**片岡一忠**（筑波大・中国史）、**加藤博**（一橋大・中東近代史）、**樺山紘一**（国立西洋美術館・西洋中世史）、**河原温**（東京都立大・ヨーロッパ中世史）、**岸本美緒**（東京大・中国近世史）、**城戸毅**（岐阜聖徳学園大・イギリス中世史）、**木畑洋一**（東京大・イギリス現代史）、**久保亨**（信州大・東洋近代史）、**斎藤修**（一橋大・比較経済史）、**佐々木隆爾**（日本大・日本現代史）、**柴宜弘**（東京大・バルカン史）、**白石隆**（京都大・東南アジア史）、**富谷至**（京都大・中国史）、**長崎暢子**（龍谷大・南アジア史）、**中塚明**（奈良女子大名誉教授・日本近代史）、**西川正雄**（専修大・ヨーロッパ現代史）、**濱下武志**（京都大・アジア近代史）、**濱中昇**（神田外語大・朝鮮史）、**三谷博**（東京大・日本近世近代史）、**宮地正人**（国立歴史民俗博物館・日本近代史）、**宮嶋博史**（成均館大・朝鮮史）、**吉田光男**（東京大・韓国朝鮮近世史）、**李成市**（早稲田大・朝鮮史、東北アジア史）

◆韓国側（敬称略、가나다順）
高柄翊（ソウル大・韓中関係史）、**金容徳**（ソウル大・日本史）、**閔賢九**（高麗大・韓国中世史）、**朴元鎬**（高麗大・中国史）、**裵永洙**（ソウル大・アメリカ史）、**白永瑞**（延世大・中国史）、**具星**（西江大・韓国近世史）、**劉仁善**（ソウル大・ベトナム史）、**柳永益**（延世大・韓国現代史）、**李基東**（東国大・韓国古代史）、**李敏鎬**（ソウル大・西洋史）、**李元淳**（ソウル大・歴史教育）、**李柱郢**（建国大・アメリカ史）、**李泰鎮**（ソウル大・韓国近世史）、**鄭鉉栢**（成均館大・ドイツ史）、**車河淳**（西江大・西洋思想史）、**崔韶子**（梨花女子大・中国史）

助成事業紹介

韓国現代戯曲ドラマリーディングVol.1
―韓国現代５作品のドラマリーディング

日韓演劇交流センター会長　石澤秀二

実は残念ながら日本語で韓国近現代の演劇作品を読もうと思っても、刊行ずみの戯曲はほとんどないのが、我が国の実情です。ましてや欧米作品に比べ、韓国戯曲の上演は数少ない。そこで私たち日韓演劇交流センターでは、韓国戯曲の体系的紹介を計画し、その第一歩が今回の『韓国現代戯曲ドラマリーディング Vol.１』と『韓国現代戯曲集 １』の出版なのです。

上演作品は、平田オリザ君らの作品選定委員会が、当センターに対応する韓国の韓日演劇交流委員会（林英雄会長）の協力を得ながら、韓国演劇の作家･作品のリスト作りから始め、討議の末、1987年６･29宣言、いわゆる「民主化」以降に活躍する若手作家・作品に焦点を当て、金光林作『愛を探して』（1990）、李潤澤作『パボカクシ』(1993)、曺廣華作『狂ったキッス』（1996）、張鎭作『無駄骨』（1996）、朴根亨作『代代孫孫』（2000）の５作家・５作品を選びました。

今回の事業は、一般観客に韓国戯曲の質の高さを知ってほしいことと、我が国の演劇関係者にも韓国現代の戯曲を深く知らせる意図がありました。そこで当センターを支える演劇７団体のうちの日本演出者協会、日本新劇俳優協会等の協力を得て、演出担当者・出演俳優を公募してオーディションを行い、製作は日本新劇経営製作者協会派遣の当センター２委員が担当しました。

こうして演劇界に広く呼びかけ、集まった初対面同士の演出家や俳優が出会い、翻訳者を交えて上演作品の内容やせりふ吟味という韓国戯曲の理解が始まり、稽古の進行につれ、日本国内の各劇団所属やフリーの俳優たちによる「日日演劇」交流が深まり、他チームの作品も必ず観る約束が生まれました。

一口にドラマリーディングと言っても、作品内容や演出者の個性により、表現の相違があり、よい意味での５チーム競演となりました。加えて日韓文化交流基金の助成をいただき、韓国から林会長、金潤哲韓国演劇評論家協会会長をはじめ、５人の作家をお招きし、上演後の作者とのアフター・トーク、李潤澤指導の２日間のワークショップ、そして最終日のシンポジウムに参加していただくことができました。韓国でもお互い多忙な５作家が一堂に会することは珍しいと言われ、若手映画監督として売れっ子の張鎭君はサインぜめにあったようです。

こうしてドラマリーディングとアフター・トーク、そして韓国演技の基礎になるワークショップと「民主化以降の若手劇作家」をめぐるシンポジウムは有機的に相互が関連しあい、日韓演劇交流史上の初めての快挙と、お褒めの言葉を方々からいただき、励まされました。地道な仕事だけに、次回も皆様のご支援をいただければこれにまさる喜びはありません。

『韓国現代戯曲集　』

『パボカクシ』
（写真提供/日韓演劇交流センター）

『狂ったキッス』
（写真提供/日韓演劇交流センター）

いしざわ　しゅうじ

桐朋学園短大演劇科元教授。BeSeTo演劇祭前日本代表。BeSeToソウル開催時の日中韓リレー上演『春香伝』の歌舞伎部分の作・演出。日本演出者協会副理事長、国際演劇評論家協会日本センター会長等を歴任。日韓演劇交流センターを創設。

助成事業紹介

荒木経惟写真展 「小説ソウル 物語トーキョー」

ナンジョウアンドアソシエイツ　北澤ひろみ

ソウル中心地の一民美術館には、連日多くの市民が訪れている。

日本を代表する写真家、荒木経惟の韓国での初の個展「小説ソウル 物語トーキョー」が、ソウルの一民（イルミン）美術館でオープンし、連日多くの観客が訪れています。

荒木氏は1982年以来、韓国を７回訪れていますが、いずれも撮影の目的で、展覧会として美術館で作品を発表するのは今回が初めてです。韓国でも荒木さんについては既によく知られていますが、本物の作品を見る機会はほとんどなく、こうした機会は強く待ち望まれていたようです。本展は一民美術館と、ナンジョウアンドアソシエイツが共同で企画し、既に東京、福岡で開催した「小説ソウル」展に、これまでの代表的なシリーズや、今年撮影された最新作を加えて再構成しました。

展示室に入ってまず目にするのは、壁一面を覆い尽くす巨大な「少女」の写真です。この作品は1991年に撮影され、この時期のソウルを象徴するような一枚です。他に、80年代から現在までのソウルと東京をとらえた180枚にものぼる作品群や、韓国と日本の特徴を端的に表す食べ物、最新作も含む花の秀作、元旦から８月15日までの私日記や、これまでの集大成である巨大な写真集『ARAKI』からの、人、街、ヌードなどを題材とする作品も多数含まれ、総展示作品数は755点を数えます。特に圧巻なのは、展示室の最後に位置する「天空」です。東京、福岡と済州島の空をポラロイドカメラで撮影した作品には、荒木さんの韓国、日本の両国に対する思いが込められています。こうした作品からは、日本と韓国の差異と共通点、また今と昔の対比などを感じ取ることができます。

内容に加え、表現形態においてもバラエティーに富んだ構成となっており、膨大な枚数のオリジナルプリント、超大型サイズのコンピュータ出力プリント、モノクロのオリジナルプリントにカラフルなペイントを施した作品、1000枚にも及ぶポラロイドによる迫力あるインスタレーション、アラキネマという、スライドと音楽による独自の表現など、多角的に紹介しています。

韓国においては近年、音楽や映画、その他様々な分野において日本の文化が頻繁に紹介されるようになってきています。日韓国民交流年でもある2002年、このような時期に荒木氏の大規模な展覧会を開催し、多くの作品を直接紹介する機会を得たことは、絶妙のタイミングであったように思えます。韓国の人々の本展に対する関心の高さは、オープン前からの報道によって知ることができましたが、実際にオープンしてみると、予想をはるかに上回る入場者を数え、その関心の高さを実感することができました。

日韓文化交流基金からの助成により、かねてから切望されていた荒木氏によるアーティストトークを実現することができました。11月30日、アーティストトークには多くの観客が詰めかけ、荒木さんの話に熱心に耳を傾けました。会場からの質問にも直接答えていただくなど、アーティストと観客が交流する貴重な場となりました。

本展が、韓国と日本の間における、より密接な文化交流の一翼を担い、また韓国においての、より自由な写真表現への刺激となれば幸いです。そして何よりも荒木経惟氏の写真を一人でも多くの方々に見ていただき、その世界を充分に堪能していただくことを願ってやみません。

アーティストトーク（2002年11月30日）。左から１名おいて荒木経惟氏、飯沢耕太郎氏（写真評論家）、李瑛浚氏（写真評論家）

筆者。「天空」の前で。

きたざわ　ひろみ

東京女子大学文理学部卒。1994年よりナンジョウアンドアソシエイツにて展覧会、アートプロジェクトに携わる。日本国内２会場での「小説ソウル」展を担当し、今回は一民美術館と共同で企画。

日韓文化交流基金事業報告

10～12月

日韓歴史共同研究委員会 第2回全体会議

11月30日(土)、ホテルオークラにおいて、「日韓歴史共同研究委員会」の第２回全体会議が開催されました。同委員会は2002年５月に発足し、第１(古代史)、第２(中近世史)、第３(近現代史)の３つの分科会で両国の歴史研究者による共同研究を行います。今回の全体会議は、分科会ごとのこれまでの調査研究進捗状況を中心に報告が行われ、共同研究計画推進のための諸策について、意見交換がなされました。

2003年度上半期助成申請受付【人物交流分野】

2003(平成15)年度上半期(4月～9月)の助成申請期間は、2003年１月６日から２月１日までです。上半期申請期間には、下半期(2003年10月～2004年３月)を含む年度内すべての申請を受け付けます。

訪日団

団体名	計	男	女	期間
大学生（第１陣）	19	13	6	10/15-10/24
大学生（第２陣）	20	11	9	10/15-10/24
大学生（第３陣）	19	6	13	11/5-11/14
大学生（第４陣）	19	8	11	11/5-11/14
済州青年	20	7	13	11/11-11/21
教員（高等学校日本語）	20	9	11	11/19-11/28

訪韓団

団体名	計	男	女	期間
京都府教員	20	12	8	10/1-10/10
大学生（外交通商部招聘）	20	9	11	10/22-10/31
大学生（第２陣）	20	7	13	10/29-11/7
福岡市教員	20	14	6	11/12-11/21

韓国図書翻訳出版事業「韓国の学術と文化」シリーズ新刊

以下の図書が韓国図書翻訳出版事業の一環として法政大学出版局から刊行されました。

金容燮著、鶴園裕訳『韓国近現代農業史研究―韓末・日帝下の地主制と農業問題―』(原題『増補版韓国近現代農業史研究』、2000年刊行、知識産業社)

1876年の開港前後から1945年の植民地解放に至るまでの韓国農業の推移を、農業経営の実態と農民運動の展開の両面にわたる実証的事例研究によって具体的に明らかにし、農業近代化への苦難にみちた歩みをたどる。農業改革における２つの方向―地主的土地所有と農民的土地所有―を峻別しつつ、開化派政権が前者の道を選択したことによって地主制の矛盾が深刻化して1862年の農民抗争、1894年の農民戦争をひきおこし、さらに日本帝国主義下の植民地的農業経営によって改革の道が閉ざされた経緯をつぶさに検証

する。封建的土地経営から産業資本主義的農業経営への転換期に生じたさまざまな問題の分析を通じて、韓国における農業問題打開への真の解決策を模索する。

報告書

以下の事業の報告書が完成しました。

訪韓学術研究者論文集　第三巻
（2000年11月～2002年2月）
訪日学術研究者論文集―一般―
第九巻（2001年１月～2002年3月）
訪日学術研究者論文集―歴史―
第六巻（2001年4月～2002年3月）

図書出版助成対象図書刊行

金洛年著『日本帝国主義下の朝鮮経済』
（東京大学出版会、2002年10月刊行）

中高生訪日研修

団体名	計※1	男※2	女※2	訪問校	期間
高校生（第１陣）	95	44	46	大阪府立千里高校、吹田高校	10/1-10/5
高校生（第２陣）	94	39	50	大阪府立長野高校、金剛高校	10/7-10/11
高校生（第３陣）	94	37	52	大阪府立大手前高校、天王寺高校	10/22-10/26

※1　引率含む　※2　生徒のみ

中高生訪韓研修

団体名	計※1	男※2	女※2	訪問校	期間
富山県中学生	105	38	62	新鷗（シング）中学校	10/26-10/30
青森県高校生	102	31	66	盤浦（バンポ）高等学校	11/13-11/17
京都府高校生	104	16	83	漢陽大学校師範大学付属女子高等学校	11/21-11/25

※1　引率含む　※2　生徒のみ

学校訪問の授業参加の１コマ
（富山県中学生訪韓研修団）

調査ノート

日本における韓国・朝鮮研究　大学教育編　2

2002年度には、国士舘大学21世紀アジア学部と、東京大学教養学部地域文化研究学科韓国朝鮮地域文化研究コースが新設された。

日韓両国の外国人留学生の受け入れの現況から見ると、双方共に相手国出身の留学生が高い比率を占めている。また、語学研修を含む短期留学者が多いのも共通する特徴である。

日韓の大学間・大学部局間学術交流協定の締結は、2000年前後から関連の学部・学科・コースの開設が相次いだことや、日本における韓国への関心の高まりを反映して、急速な伸びを見せている。韓国の大学の積極的な留学政策の展開もあり、特定の学校のみをパートナーとする「姉妹校」的な交流協定から、実質的な留学先や共同研究のパートナーの確保のために、1校が数多くの学校と協定を結ぶ傾向はさらに強まっている。

●2002年度新設学部、コース

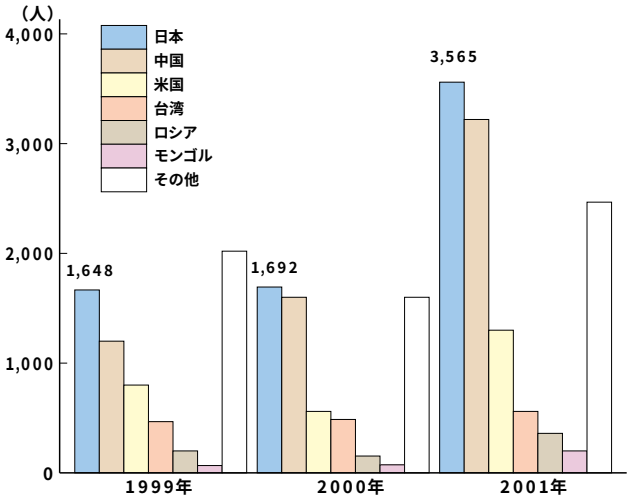
大学学部学科名	概要	韓国の大学との交流協定
国士舘大学21世紀アジア学部アジア地域デザインコース、21世紀日本理解コース、アジアビジネスコース	2002年4月新設。アジアの現在の多様な現実を社会文化の総合的な観点からとらえる方法を学ぶ。アジア全般に対する教養を深め、アジア各地域との交流を深めていくことが設立趣旨であり、韓国との相互交流も積極的に進めている。	漢陽大学校 安東大学校 高麗大学校 東義大学校
東京大学教養学部後期課程地域文化研究学科韓国朝鮮地域文化研究コース	2002年度新設。社会科学を中心とした地域研究に必要な広い知識と深い理解力の育成と、それらの基礎となる卓越した語学力を磨くことを目的とする。	ソウル大学校

●日韓大学間交流協定締結の現況　（単位：件）

締結された年代	締結数	日本側大学の国公私区分		
		国立	公立	私立
1960年代	1	-	-	1
1970年代	13	2	-	11
1980年代	53	19	4	30
1990年代	429	221	17	191
2000-2002年	231	135	9	87
締結年代不明	182	50	6	126
合計	909	427	36	446

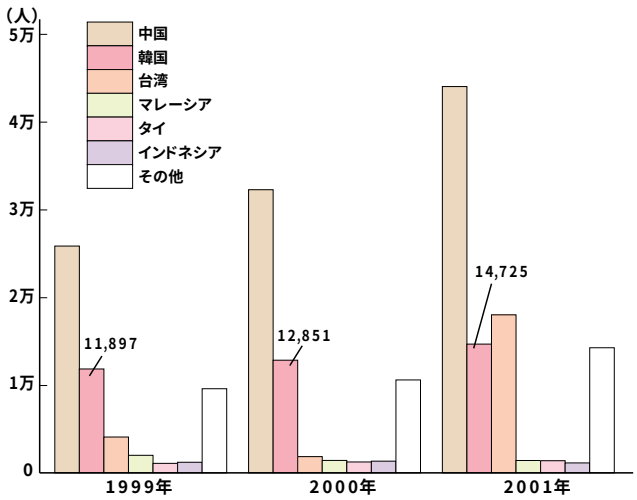
日本文部科学省「大学等間交流協定締結状況（平成13年10月１日現在）」、韓国教育人的資源部「2000年度国内大学と外国大学間姉妹結縁および単位交流現況」データをもとに、独自の調査を加えて作成。大学間、部局間協定を合わせた数値。

●韓国における外国人留学生受け入れ　主要国別データ



韓国教育人的資源部「2001国内外留学生統計」（2001年8月31日現在）から作成
※短期留学・語学研修を含む

●日本における外国人留学生受け入れ　主要国別データ



日本文部科学省「留学生受入れの概況」各年度版から作成
※短期留学・語学研修を含む

◆基金ホームページURL
http://www.jkcf.or.jp

◆発行　財団法人 日韓文化交流基金
〒105-0001　東京都港区虎ノ門５丁目12番１号
虎ノ門ワイコービル3Ｆ
電話　03-5472-4323　FAX　03-5472-4326
◆発行日　2003年１月10日